

# Living the Lotus

Buddhism in Everyday Life

New Year's Issue



## 元気で精進を

立正佼成会会長 庭野日鏡



身を修め、家庭を斉えることなしに  
国の平和、世界の平和はありえない

あけまして、おめでとうございます。

依然、コロナ禍は続いています。街の中では徐々に普通の生活を取り戻している様子もうかがえます。感染には気をつけながら、一日一日を前向きに過ごしてまいりましょう。

ある調査によると、コロナ禍を機に大事にしたいと思うようになったものは、家族や健康、時間、信頼などでした。感染拡大を通して、大勢の人がこれまでの生活を振り返り、新たな価値観を身につけつつあるようです。私たちも、簡素を心がけ、本当に大事なことに集中したいものです。

一方、昨年、ロシアによるウクライナ侵攻という緊迫した国際情勢に直面しました。すでに数万の人々が犠牲となっています。一刻も早く戦争が終結し、平穏な日常が取り戻せるよう、皆さまと共に祈りを捧げ、自分に何ができるかを考えていきたいと思ひます。

横山大観になぞらえて庭野日鏡開祖が描いた図の前で

私たちがまず大事にしなければならないのは、一人ひとりの「内なる平和」でありましょう。戦争も突き詰めれば、人間の心の働きが引き金になるといえます。最近よく「あの国が悪い」「あの人は許せない」といった声を耳にします。素直な心情なのでしょうが、宗教的に大切なのは、自分自身の心が真に平和であるかを省みることです。

日ごろ、周囲の人を言葉や行動で傷つけている人が、いくら平和を唱えても説得力はありません。常に「自分はどうか」「平和な心といえるのか」と内面に目を向けていくことが重要であります。

このような心の持ち方は、日ごろから身につけていくべきことです。身近な例を挙げれば、朝起きて、雨が降っていると、つい「悪い天気だ」などと言いがちです。目の前のさまざまな出来事に対して、いつも不平不満を抱き、否定的なものの見方をしてしまう習慣を変えたいものです。

それでも、戦争を起こす人は許せない、人を殺めたり、傷つけたりしてはいけないという義憤に駆られたら、何よりもまず「自分は絶対にしないぞ」と固く決意するのが、宗教的な態度であります。

加えて大事なことは、社会の最小単位である家庭の中で、ご宝前を中心にして、しっかりとした人間教育、人格の形成がなされていく「齊家」（家庭を齊えること）を実現していくことです。

儒教の『大学』に、「修身齊家治國平天下」との一節があります。心を正し、身を修め、家庭を齊えることが、国を治め、世界を平和にすることにつながるという意味です。言い換えるならば、心を正し、身を修め、家庭を齊えることなくしては、国の平和も、世界の平和もあり得ないということです。このことをお互いさまにしっかりと心に刻みましょう。

さらに、これまで私は、日本の伝統を受け継いで、まず自分の国を良くしていく、立派な国を打ち立てていくことが重要であると申し上げてきました。

日本の国の特徴は、世界にも比類のない天皇・皇室を戴き、そのもとに建国以来今日まで、国民が和となり、豊かな文化を築いてきたことにあります。その伝統を踏まえて、日本を立派な国にすることは、どんなに世界がグローバル化しようとも、一番足元の大事なことであり、それがあって初めて世界に通用するのだと思います。



日本は、上代じょうだいの頃、国名を「大和（やまと）」と定め、「大いなる平和」「大いなる調和」の精神を終始一貫することを、国家的な理想としてきました。

聖徳太子しょうとくたいしは、「和を以て貴しと為す」という言葉を十七条憲法の第一条かかに掲げられています。

そのような伝統を受け継いで、日本の国をしっかりとした平和な国家にし、それを世界はきゅうに波及させていくことが大切であります。

そうした地道な努力の積み重ねの上に平和な世界は築かれるのです。

同時に心がけたいのは、私たち一人ひとりが、遠く離れた国々の出来事に対しても関心を持ち続けていくことです。そして、困難な現実に直面している人々のことを知り、思いを寄せ、苦しみや悲しみを分かち合うことから、深い祈り、次への行動が生まれます。

身近には、本会いちじきの一食を捧げる運動をはじめとする平和活動、W C R P（世界宗教者平和会議しんしゅうれん）や新宗連（新日本宗教団体連合会）などの取り組みがあります。それぞれの立場で、主体的、自発的な姿勢で参加していききたいものです。

皆共に、日々感謝の心で目覚めて  
元気で生き生きと精進していこう

こうしたことを踏まえ、私は「令和五年次の方針」を次のようにお示しました。

今年こんねん、本会かげはお蔭様で、創立八十五周年を迎えました。皆共に、日々感謝で目覚め、元気で生き生きと精進して参りましょう。

今年次も新型コロナウイルスの感染状況を見据えつつ、信仰生活を通して、お互い様に、夫婦として、父母として、親として、未来すを担う幼少年・青年達いかを如何にして育て、人格の形成をはかるか、如何にして家を斉えていくか、さらに、日本の伝統を受け継いで、如何にして立派な国を打ち立てていくか、創造的に真剣に務めて参りたいと願っています。



昨年もお伝えしましたが、夫婦（若い世代）、父母（壮年の世代）、親（高齢の世代）のそれぞれが、「人を植える（育てる）」という根本命題こんぽんめいだいに全力を尽くすことは、本会のみならず、社会や国においても極めて重要です。

また今年次の方針には、「皆共に、日々感謝で目覚め、元気で生き生きと精進して参りましょう」との一文を加えました。

毎朝のご供養の際、「本当に有り難い」「お陰さま」という感謝の気持ちで満たされることは、一日一日を丁寧ていねいに、精いっぱい生きていく上での源泉げんせんといえます。その積み重ねが充実した人生につながるのです。

さて、私たち人間にとって、心の持ち方が肝心要かんじんかなめのことであるのはいまでもありません。自分の心次第で、目の前の現象は、良いほうにも悪いほうにも無限に変化するからです。

だからこそ、常に自分の心を磨きみが、調えることととのを欠くことができないのです。

そのことを象徴した法句經の一節があります。

「おのれこそ おのれのよるべ おのれをおきて 誰によるべぞ よく調えしおのれにこそ まこと得がたき よるべをぞ獲んえ」

「よるべ」とは、頼みにして身を寄せる所、依りどころのことです。自分の心を調えることによって、自分そのものが、かけがえのない依りどころとなる、ということです。

もちろん仏の教えは、無上の宝むじょうです。ただ仏法は、学んで、それを実行して、身につけて初めて、真価しんかが得られます。単に学び、知っているという段階でなく、しっかり実践できるところまでいかなければ、本当に学んだことにはなりません。

たとえ自らが煩惱ぼんのうにさいなまれようとも、教えに順したがって自分をコントロールし、よりふさわしい道を歩むことが、いわば「おのれこそ おのれのよるべ」ということであります。

その意味で、私たちが心を磨いていくには、三つの基本信行しんぎょう（ご供養、導き・手どり・法座、ご法の習学）はもちろんのこと、聖人せいじんと呼ばれる方々の本などを座右の書として、それを目標・理想にして、自分を築く努力をすることが大事になります。私自身も慣性かんせいに流されないよう、仏教のみならず、儒教などあらゆるものから学ぶことを心がけています。



大自然に触れるのも意義深いことです。四季は巡り、木々も草花も、鳥や虫も、毎日変化し、新しくなっています。

曹洞宗大本山・永平寺の貫首をなさり、満百六歳というご長寿であられた宮崎奕保禅師は、「真理を黙って実行しているのが大自然である」とおっしゃいました。

私たち人間は、あの人が悪い、世の中が悪いなどと論評をしがちです。しかし本来は、大自然の如く、黙って真理を実行していける一人ひとりになることが、救われるもとではないかと思えます。

人間の心というものは、単なる生物的、動物的な生活から進化して、何十万年も経って、ようやく人を思いやる、情のある心を持つようになったといわれています。

特に「悲しむ」という心は、人間の情緒の最も尊い働きの一つであります。自分の親、きょうだい、子供など身内のことばかりでなく、他の人のこと、世の中のこと、世界の国々のことに心を寄せ、共感し、悲しめるようになってこそ文明人であると教えられています。

他の人が困難に直面しているのを見て深く悲しむ——この心こそ、世界を平和にしていく原動力であります。

本会でいえば、人の悲しみに触れ、共に泣き、何とか救われてほしいと一心に願うことから、仏さまの教えをお伝えしたいという心が起こさしめられるのです。そこに、仏さまの慈悲が現れているのだと思えます。

法華經の信仰に篤い宮沢賢治の言葉に、「永久の未完成これ完成である」とあります。いつまで経っても未完成だという気持ちで人生を生きることが、本当の意味での完成なのだということです。私たちも「もうこれで分かった」ということではなく、「分からない、分からない」と、いつまでも突き詰めて、求道していくことが肝心であり、それが「心田を耕す」ということにほかなりません。

今年も一年、皆さまと心を磨き合い、日々感謝で目覚め、元気で生き生きと精進をさせて頂きたいと願っています。

(『佼成新聞』令和5年1月1日号より)

